発声指導法研究Ⅺ：オンデマンド授業による発声指導への理解（1）

宮　下　　茂
（長崎大学教育学部音楽教育（声楽））

The Vocalizing Guide Method Research Ⅺ：Understanding of vocal instruction through on-demand lessons（1）

Shigeru MIYASHITA

１．はじめに

これまで筆者は教員養成学部において，「小学校音楽科」，「声楽」，「歌唱表現法Ⅰ・Ⅱ」等，小学校教員や中学校音楽科教員を目指す学生への歌唱指導や発声指導の方法を学ぶ授業を担当してきた。これらの授業は実技指導を中心として，対面により歌唱を行うのが通例となっている。しかし，新型コロナウイルス蔓延の影響から授業のオンライン化が求められ，感染防止の観点から集団での歌唱が危険視される事態となり，対面による実技指導が実施できない時期もあった。実技指導を主とした科目にとっては困難な状況であるが，反して，教員としての指導の技能を学ぶ者にとっては，学習内容や方法を見直し，歌唱指導や発声指導の学びを深めるのためのきっかけとなり得る好機になったと筆者は考える。

通常の実技授業で自らの考えを基に歌唱する学生もいるが，多くの学生は楽曲を歌唱することのみに重点を置き，発声や表現について自ら考えることなく，それらを指導者からの指示のみに頼ることが頻繁である。そのような学生は指示された言葉をぼんやりと覚え，教育実習で担当する歌唱授業においても，児童や生徒の歌唱の状況に関わらず，実技授業で自分が指示され，覚えた言葉を繰り返し発言しているだけのように見える。残念ながら，実技授業で指示された言葉の意図を理解せず，目的が分らないまま言葉を覚えて発言しているように思われる。

コロナ下におけるオンライン授業では，これら実技授業の中で指示される言葉の意図を理解し，学生が目的を持って発言できるようになることを目標とし，有効な学習時間として活用できる授業内容を考えた。ただし，すべての学生が歌声や音楽を発せられる環境で授業に参加できるとは限らないため，リアルタイムでの授業内容の研究とせず，学生が受講時間と環境を自由に選択できるように，オンデマンド教材の作成を本論文の研究の目的とした。

２．オンデマンド教材の構成について

オンライン授業では，すべての受講学生が，その場で歌唱できる環境で授業に参加可能とは限らないため，それぞれの学生が受講時間と受講環境を選ぶことのできる，オンデマ

ンド授業の形態を選択した。

オンデマンド授業としては，１コマ90分５回の構成とし，スライドを視聴しながら歌唱学習を行い，同時に，理解した内容を回答用紙にまとめることとした。

オンデマンド教材では，オンデマンド授業に対応できていない学生への配慮も必要であることから，Microsoft 社の PowerPoint スライド・ファイルを使用し，クリックごとにスライド内の文字や図が現れ，学生自身のペースで学習が進められるようにした。また，スライド内の文章を最小限とし，図やキーワードを基に学生自身が文章化し，授業内容の理解と知識の定着を図った。そして，大学の学習システムのメッセージ機能を利用し，提出された回答を基に学生の疑問や質問への追加説明や，学生の模範的な回答を学生間で共有できるように配慮を加えた。（図１参照）

３．オンライン授業 第１回

３.１「活動の成果を考える」

初めの課題として，近い将来教員になる可能性を持つ学生であることから，学校教育の音楽授業で教える斉唱や合唱について，授業における児童や生徒の歌唱の目的，教育の目標について考えるきっかけとなる質問から始める。（図２参照）

授業では，活動や学習の成果が求められる。まず，学生への問いかけとして，自分が教員になった時に，歌唱や合唱の活動，歌唱や合唱の指導を行うと仮定して，活動の成果を何に求めるかを考えてもらう。

活動の成果を，「歌う喜びや楽しみに求める」とする回答が予想されるが，歌唱の内容に関わらず，喜びや楽しみは歌い終えた時点で完結してしまい，成果として残すことは困難と考える。また，活動後の評価を行う際，喜びや楽しみを評価することは困難である。しかし，活動の成果を表現の内容に求めたとしても，実際に歌唱の表現内容や表現結果を感じ取れるのは歌唱を聞く側であり，歌唱する側は活動の成果として感じ取るのが困難である。そのため，聴衆のいない授業では指導者がその役割を務める必要があり，「歌唱の内容に対する成果を讃える」，「演奏を聞いた喜びや感動を伝える」等を，学習者に活動の成果として伝えることとなる。だが，すべての指導が良い成果を出すとは限らず，授業で活動させたことを優先するあまり，指導者には結果に反する誉めをしてしまうこともある。その真実でない誉めは，間違った解釈により勘違いをしてしまうなど，児童や生徒にとって学習の道を誤る可能性がある。指導者が児童や生徒の歌唱から感動を受け，正直な誉めを伝えるためには，歌唱の表現内容を高められる，歌唱技術を指導できる能力も必要であることを理解してもらいたい。（図３参照）

次の課題は，授業の中の技術的な指導の目指すべきサイクルについての理解である。指導者が歌唱技術の指導を行うことにより，児童や生徒は歌唱技術を修得し，その歌唱技術により，歌唱表現の質が高まってくる。その歌唱表現の成果について，指導者から喜びや感動を伝えることにより，児童や生徒が満足感を得られ，更なる学習への意欲が高まれば，指導者にとっても生徒に歌うこと（学習）の喜びが教えられたことになる。このような授業の中での歌唱表現の質を高めるサイクルを目標としてもらいたい。（図４参照）

最後に，児童や生徒が聞き手に喜びや感動を与えられる歌唱表現ができるように，指導者として歌唱技術を教えられるようになるために，学生自身も歌唱技術を身に付けること

を目標とする。そのためには，歌唱技術に関する自身の考えを持ち，自らの考えと理解を深める意欲につなげてもらいたい。（図５参照）

３.２「声楽の発声について～歌唱授業で教える『発声』とは？」

ここでは，具体的な発声指導に入る前に，学生自身が経験してきた音楽授業の中で受けたであろう，教員からの発声に関する指導を思い出し，指示された内容や意図に対する理解について考えるきっかけを与える。（図６参照）

まず，一般人の歌唱と声楽家の歌唱との比較により，声楽分野の発声の特徴について理解を促す。誰もができる歌唱であるが，一般人の歌唱と声楽家の歌唱では歌声の聞こえ方に違いがある。一般人が音楽ホールのステージ上に立ち，一人で歌唱しても客席の聴衆に歌声が聞こえてこないことがある。そこで，一人の歌唱で聞こえないのであれば，複数で同時に歌唱すればよい。また，そのままでは聞こえにくいことから，ステージ上に反響版を組み上げ，音の反射も利用して，客席で歌声を聞き取れるように工夫がなされる。客席からは，テレビやオーディオ機器からの音を鑑賞するように，≪耳を傾けて≫聴取することとなる，こうした歌唱が一般的な≪コーラスの歌唱≫と考える。それに対し，声楽家は客席の聴衆の耳元に歌声が聞こえてくるように歌唱する。そのため，オペラ公演などのようにオーケストラポットがあり，ステージと客席との間にオーケストラの演奏する≪音の壁≫があったとしても，客席ではオーケストラの音に邪魔されることなく歌声を聞くことができる。これが一般人の歌唱と声楽家の歌唱との発声の違いである。（図７参照）

３.３「声楽の歌声について～声楽的に『良い声』『悪い声』とは？」

ここでは，指導や鑑賞の際に耳にすることの多い言葉，≪良い○○≫，≪悪い○○≫について，呼吸と歌声を例としてイメージを基に理解を促す。（図８参照）

歌唱の呼吸については，多くの学生が「腹式呼吸」であるべきと理解をしているが，悪い呼吸とされる「胸式呼吸」での歌唱が注意される理由について理解をしてはいない。他にも「横隔膜呼吸」,「安静呼吸」等，様々な呼吸の名称を耳にすることがあり，これらの呼吸の違いや解釈についても難解と考える。声楽の専門家でも諸説ある呼吸の違いであるが，まずは人間の呼吸に注目して，それらの呼吸の違いについての理解を促していく。

歌唱授業での一般的な指導では，良い呼吸とされるのが腹式呼吸であり，悪い呼吸とされるのが胸式呼吸であるとされていることから，呼吸に複数の方法があるように思われやすいが，そもそも人間の呼吸は肺での呼吸であり，一つの方法に集約されている。呼吸は生きるために続けられるものであり，胸・腹・横隔膜の共同作業で自動的に行われると一般的に言われている。この生きるために止まることのない呼吸を「安静呼吸」と呼ぶが，「腹式呼吸」,「横隔膜呼吸」等，名称の言い換えと考えることを歌唱の呼吸の理解への第一歩とする。（図９参照）

次に，歌声についての理解を促していく。歌声の説明において，実際の音を聴取できない場合，振動などのイメージを基に説明がされることがある。良い歌声の場合，声帯が位置する喉元と上アゴが振動することを初めに説明する。（図10参照）

上アゴが振動する理由や振動させる方法についての説明では，息の流れのイメージを基に説明をすることがある。通常の口から流れる息の他に鼻腔からの息の流れが起こった場

合，その二つの流れに挟まれる上アゴの位置が振動を起こすという説明である。実際には正しく発声をした場合，軟口蓋が上昇し口腔内の鼻腔への入り口が閉じることから，息が鼻腔を流れることはないが，歌声を理解するイメージとして使われることの多い説明である。この時の発声方法を「頭声的発声」と称する。教師によっては，「頭から声を出す」と表現する（指導する）こともあるが，息の流れをイメージする説明の方が理解されやすいと考える。（図11参照）

頭声的発声に対して，悪い歌声の代表とされるのが≪喉声≫である。この歌声は，鼻腔への息の流れをイメージせずに，口からの息の流れで歌唱した場合の歌声であり，教師から「もっと息を流しなさい」等と指導されることのある歌声である。口からの息の流れで歌唱される喉声であるが，注意を受けた児童や生徒のイメージとしては，喉の位置で息が止まっていると感じられるのもこの歌声である。教師から息を流して歌うように促す助言を受けても，喉の位置で息が止まっていると考える児童や生徒は，それまでと同様に口からの息の流れで歌おうとしてしまい，解消することが困難な歌声でもある。（図12参照）

息の流れをイメージすることで理解しやすい喉声であるが，息の流れについて教えられることなく，喉声にならず，良い歌声を出せる生徒もいる。息の流れ以外の視点から良い歌声について，歌声の出し方を考えるには舌の形や位置をイメージするのが有効である。喉声の場合，舌が口腔内の奥に置かれていることから，咽頭蓋が器官を塞ぎ，息の流れが悪くなることが多い。その際に教師から，「舌を平らに」と指導されることがある。喉声の原因として，舌の形が先か，息の流れが先かの議論をしても無益であるが，喉声のきっかけが息の流れや舌の形に起因するのは明らかであり，教師が舌の形や口腔内の空間についての指導を行うことや，喉の位置についての指導を行う根拠がここにある。（図13参照）

以上が良い歌声と悪い歌声を区別するための，イメージについての学習である。

最後に，理想的な歌声を出すための発声についてまとめていく。ポイントになるのは息の流れのイメージであるが，息が鼻腔と口腔の双方から流れて発声できるために，舌を平らにさせることが重要である。また，教師は理想的な歌声が出せるようにするために，「喉を開いて歌いましょう」，「あくびをするように歌いましょう」など，言葉を工夫して指導や指示を行うことがある。これまでに，学生自身が音楽授業の中で聞いたであろう，教師からの発声に関する指示をもう一度思い出してみれば，指示された内容や意図が理解できると考える。（図14参照）

４．受講学生の反応について

オンデマンド授業では，視聴した授業の内容に対応した質問への答えとして，受講した学生が自身の考えを文章にまとめ，文書ファイルを提出するようにしている。あわせて，受講した授業への感想や質問，授業にかかわる分野への考えや疑問等を調査した。（図17参照）

授業後に感想や疑問を文書で提出することにより，学生がこれまでの経験の中で，様々な歌唱に関する疑問を持っていたことが分かった。

例としては，「自分で『音痴』だなと感じていますが，『音痴』とは何でしょうか。」，「仮に教師が音痴だったらどうすれば良いですか。」，「今は合唱よりもカラオケの方が，一般的に歌う機会が多いと思うのですが，カラオケとの違いはありますか。」，「自分は実際に

授業で指導できる気があまりしないし，それをどうカバーしていいかもよくわからない。最低限，気を付けるべきことは何か教えていただきたい。」等，一言で答えきれない内容の疑問や質問が多数寄せられた。

音楽授業における歌唱活動の目的を問う，オンデマンド授業第１回の前半部分については，「今まで，音楽の授業でなぜ歌うのかを考えたことがなかったので，初めて歌うことの意義を考え，理解を深めることができました。児童が音楽や歌唱の学習を通して，音楽の世界だけでなく，自分の世界観や価値観自体を広げるきっかけになればよいなと思います。同じ歌を歌うにしても，歌うことの目的とその根拠をもって指導することで，指導の内容も，より明確になると思います。」等，歌唱活動の目的を考えるきっかけになったという感想が多数見られた。

また，小学校での教育実習後にこの授業を受講した学生から，「教育実習で音楽の授業を行い，その際，褒め方の難しさを実感した。的確に褒めたりアドバイスしたりすることが，表現内容を高めることにもつながると，今回の授業を通して感じた。」といった，教師の発言に関する前向きな感想もあった。

スライド製作にあたっては，文章を最小限として，イラストや PawaerPoint のアニメーション効果を利用して，画面上に現れたキーワードから学生が文脈を考えながら，直感的に理解し，飽きることなく歌唱分野について学べるように心がけた。「静止画のスライドではなく，音や先生の歌の動画などが張り付けられていて，わくわくしながらスライドを見ることができました。対面とも，これまでのオンデマンドとも違う感覚で，面白かったです。」という感想や，「今まで，歌唱を声楽目線で見てきたことがなく，喉で歌う，腹で歌うという表現は聞いたことがあるけれど，実際どう違うのかあまり理解できていなかった。今回，この講義のイラストを用いた説明で，イメージしやすくなり，家で実際に『ふるさと』を２パターンで歌ってみて，全く違うと感じた。小・中・高校時代こうやって学んでいれば，より歌唱が楽しかったのではないかと感じた。」等，学生の理解を得られた結果が読み取れた。また，後半の歌唱に関する授業部分では，実際の歌声の比較聴取によらず，音楽授業で耳にすることの多い言葉について，イラストを用いてイメージをできる限り視覚化して解説を行い，それにより有効に学べたことが分かった。

これまで受けてきた音楽授業を思い出し，「『息をもっと吸って』と先生や先輩からよく言われてきたが，それではよくわからない。どうすれば息をたくさん体の中に取り入れることができるのか，具体的に言う必要がある。音楽が好きな子嫌いな子がいる授業では，特にわかりやすい声掛けができるようにしていきたい。子どもたち全員に音楽が好きだ，楽しいと思ってもらえるような，授業づくりをしていきたい。そのためにこの授業では，よく考え学びを深めていきたい。」と言った意欲的な感想もあった。

視聴した授業の内容に対応した質問に対する，学生が自身の考えをまとめた文章では，過去に受けた学校の音楽授業での，教員の発言を思い出しながらまとめる学生が多く見られた。その回答の中では，音楽教員から指示された言葉をそのままに，記憶している例としてまとめるだけの学生もいれば，音楽教員から指示された言葉と今回の授業で理解した内容とを照らし合わせ，新たに理解した自分の言葉として，指導の意図をまとめる学生とに分かれていた。前者の回答は，中学校教育課程に所属する，音楽を専攻とする学生からの回答に顕著にみられ，後者の回答は，小学校教育課程に所属する，音楽を専攻としない

が，音楽に関心を持つ学生からの回答に多く見られた。これらの違いは，中学校教育課程に所属する音楽を専門として学習する学生ほど，教員からの指導や指示を受けることが習慣化し，指示の意図をあらためて考えようとしないことにある。自分が受けてきた指導への疑問も感じない学生がいるように思われる。しかし，小学校教育課程に所属する後者の回答では，教員からの指示の意図を，これまで自分が理解していなかったことに気付くとともに，教員からも児童や生徒に意図が伝わっていなかったことに気付き，授業での伝え方についての自らの考えを述べる学生が多くいた。これらの事実から，今回のテーマとは別の課題が見えてきた。

５．まとめ

オンデマンド授業であることから，授業の最中に学生からの質問を受けることや補足説明を行うことができないため，授業後に改めて学生に向けてのメッセージを送ることとした。第１回の授業に関しては，以下のようなメッセージを送った。

「第１回授業では，歌唱授業の目的について考えてもらいました。音楽の授業の目的を質問すると≪楽しさ≫と答える人がたくさんいます。中には，音楽の授業について質問しているのに，部活動の話を始める人もいます。部活の音楽は，たしかに楽しかったことと思われますが，思い出して欲しいのは授業の音楽のことです。実際のところ，皆さんはこれまで義務教育の９年間，音楽の授業を受けてきて，何を身に付けてきましたか？　９年間，同じ科目名で学び続ける教科は，国語と音楽だけです。国語の授業から身に付けたことは，たくさんあると思います。音楽の授業についても，身に付けたことが口にできるようにしたいですね。それが，音楽授業の目的の一つになると思います。」

オンライン授業ではオンデマンド教材を作成し，音楽授業における歌唱分野のあり方や指導の考えについての学びを行った。

児童や生徒から教師に向けて歌唱を行い，聞き手である教師に喜びや感動を与えられる「歌唱表現」を生徒ができるようになるために，教師が生徒に「歌唱技術」を教えられることを目標として，オンデマンド教材による発声指導についての授業研究を引き続き行っていく予定である。

参考文献

［１］酒井弘，新版　発声の技巧とその活用法，音楽之友社，1974
［２］フレデリック・フースラー／イヴォンヌ・ロッド＝マーリング／須永義雄／大熊文子，うたうこと　発声器官の肉体的特質－歌声のひみつを解くかぎ－，音楽之友社，1987
［３］コーネリウス・リード／渡部東吾，ベル・カント唱法　その原理と実践，音楽之友社，1987
［４］Ｐ．マリオ・マラフィオッティ／魚住幸代，カルーソー発声の秘密　合理的なヴォイス・トレーニング，東亜音楽社／音楽之友社，1996

図１）扉絵

図２）スライド１

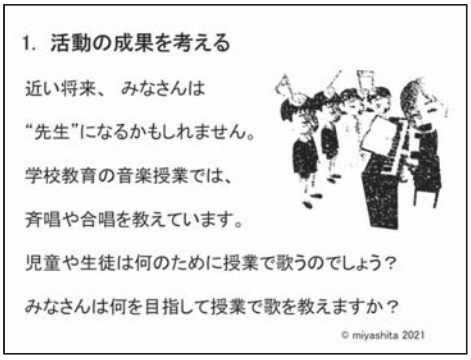


図３）スライド２

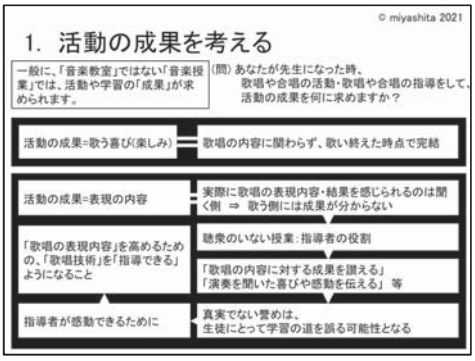


図４）スライド３

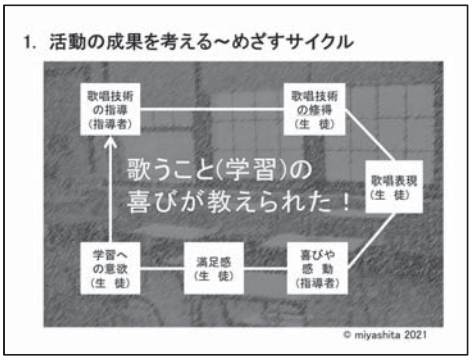


図５）スライド４

図６）中扉①

図７）スライド５

図８）中扉②

図９）スライド６

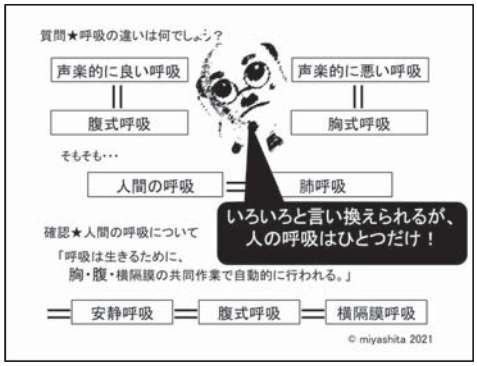


図 10）スライド７

図 11）スライド８

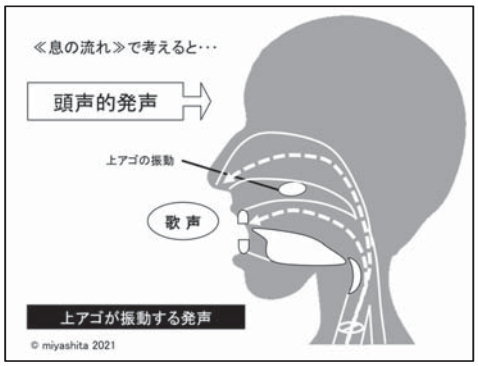


図 12）スライド９

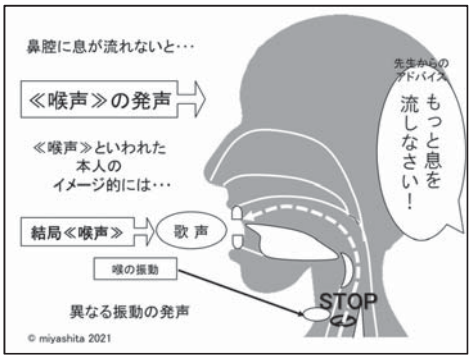


図 13）スライド 10

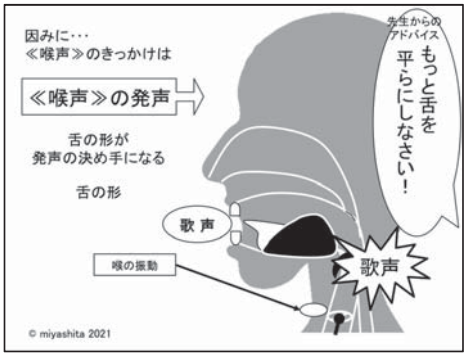
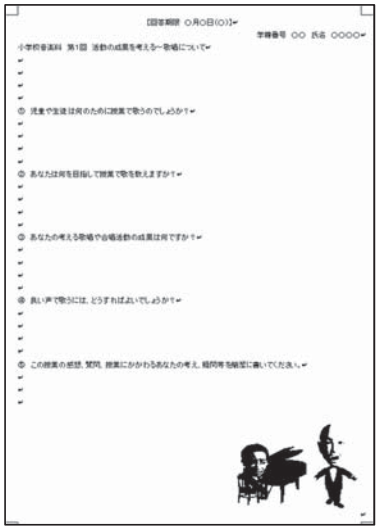


図 14）スライド 11

図 15）スライド 12

図 16）扉絵

図 17）回答用紙


【回答期限 ○月○日(○)】
学籍番号 ○○ 氏名 ○○○○
小学校音楽科 第1回 活動の成果を考える～歌唱について
① 児童や生徒は何のために授業で歌うのでしょうか？
② あなたは何を目指して授業で歌を教えますか？
③ あなたの考える歌唱や合唱活動の成果は何ですか？
④ 良い声で歌うには、どうすればよいでしょうか？
⑤ この授業の感想、質問、授業にかかわるあなたの考え、疑問等を簡潔に書いてください。